乳幼児身体発育値の沿革と年次推移に関する考察

高石昌弘　（大妻女子大学人間生活科学研究所）

研究要旨　平成 2 年調査の一般調査では出生数減少によって調査対象数が激減した
体重の乳児期前半におげる僅かな減少は、最近話題とされている出生体重の低下に関する論評と関連し、今後検討すべき重要な課題であろう。調査は多くの新しい情報をもたらし平成 2 年の乳幼児の身体発育について将来とも定期的な Growth monitoring を継続していくべきである。

A．本検討の意義

平成 12 年厚生省乳幼児身体発育調査の準備をするに当たって、これまでの調査のやり方や結果の年次推移を振り返り、来るべき調査の持つ意義を確認することは、重要なことである。

B．調査型式の沿革

わが国における乳幼児身体発育値の沿革については、以下のとおりになる。平成 2 年調査の一般調査では抽出地区数はその前の回と同じであったが、出生数減少によって、抽出地区内の調査対象数が激減したことは特記しておく必要があろう。以下にわが国における乳幼児身体発育基準の種類とその内容を示す。カンマで区切られた記載事項は次の通りである。

発育基準，調査年，調査資料，調査対象数，調査の実施主体，発育基準の階級区分とその方法

わが国における乳幼児身体発育基準の種類とその内容：

乳幼児身体発育標準値（栗山・吉永値　東大小児科値），大正末期から昭和初期（1930），乳幼児審査会資料など，約 20000，個人（多数の報告のまとめ），平均値のみ

斎藤・清水値，1940～42(1949)，全国的サンプリング，24767，体力研究協議会基準部会，5 階級級外、上、中、下、不良，平均値および標準偏差

1950 年（昭和 25）厚生省基準値（斎藤・船川値），1950（1953），全国的サンプリング，16459 文都省科学研究厚生科学研究委員会（厚生省），5 階級　級外・上・中・下・不良，平均値および標準偏差

1960 年(昭和 35)乳幼児身体発育値, 1960(1961), 全国的サンプリング 15823，厚生省（行政調査），3 階級　大、中、小，平均値および標準偏差

1970 年(昭和 45)乳幼児身体発育値, 1970(1971) 全国的サンプリング, 16489, 厚生省（行政調査），3 階級　大、中、小，平均値および標準偏差，（1976 発表分，3 階級（母子健康手帳）8 階級（保健指導専用），パーセンタイル）

1980 年(昭和 55)乳幼児身体発育値, 1980(1981), 全国的サンプリング，一般調査　20121　病院調査　3886，厚生省（行政調査），3 階級（母子健康手帳）8 階級（保健指導専用），パーセンタイル

1990 年(平成 2)乳幼児身体発育値, 1990(1991), 全国的サンプリング，一般調査　12484　病院調査 4137，厚生省（行政調査），5 階級（母子健康手帳）8 階級（保健指導専用），パーセンタイル

C．発育値の年次推移と 1990 年調査の値の特性

全国的規模による調査が最初に行われた 1940（昭和 15）年以降の年次推移を概括すると次のとおりである。戦中および終戦直後の劣悪な生活条件によって、乳幼児の体位は低下したが、その後の経済復興に基づく生活条件の改善によって、体位は急速に向上し、1950（昭和 25）年から 1960（昭和 35）年、そして 1970（昭和 45）年と 20 年間の発育値の伸びは極めて大きかった。しかし、その後、1980（昭和 55）年までの 10 年間の伸びは僅少であり、今回の調査による 1990（平成２）年の値では、身長について僅かな伸びが認められるが、体重、胸囲、頭囲は乳児期および幼児前期

で、やや減少傾向がみられ、年次推移という意味では一応の水準に達したものと考えてよい。体重の乳児期前半におげる僅かな減少は、最近話題とされている出生体重の低下に関する論評と関連し、今後検討すべき重要な課題であろう。

D．Growth stamdard と Growth monitoring

平成２年の調査は乳幼児の身体発育について多くの新しい情報をもたらしたと思われる。乳幼児身体発育値は個々の乳幼児に対する保健指導のための Growth stamdard であると同時に、身体発育に影響する多くの諸条件を反映したものとして、母子保健さらに公衆衛生上の課題を探る大きな要素となる。Growth monitoring の意味はここにもあるのであって、Tanner が "Growth as a mirror of the condition of society"として論じているのは傾聴に値する。このような意味で、今回行われた調査結果は、さらにその内容につき詳細な分析を進めていく必要があろう。そして、それらの成績を基盤としながら今後の様ざまな生活条件の変化が乳幼児の体位にどのような影響をおよぼすかについて、将来とも定期的な Growth monitoring を継続していくべきである。今回の調査結果が乳幼児保健指導の実際に役立ち、子どもたちの幸福と母子保健の発展に寄与することを念じて止まない。

E．文献

１）厚生省児童家庭局：平成２年乳幼児身体発育調査結果，1991

２）神岡英機：代表的な発育値と 1980 年調査値の特徴．林路彰 監修：乳幼児身体発育値．南山堂，東京，1989:11-22

３）Tanner JM ：Growth as a mirror of the condition of society - sekular trends and class distinctions . Demirjian, A Ed : Human growth - a multidisciplinary review. Taylor & Francis, London, 1986:3-34